

俳句

青木敏行

安保淳子

嬰にぎる母の小指や春の風

(みずず会・森の座)

龍天に登る江ノ島大灯台

袴取る指先黒き土筆和

(天為湘南)

新小屋の子山羊跳ねる夏始

島の風いつまた吹かんウクライナ
島をぬひ進む客船白夜光

大本営地下壕跡の花木権

入院の母に付き添ふ長き夜

塩引を吊る三和土にも神在す

形良き団栗有りて弥次郎兵衛

阿部峰子

あや子

秋灯下定價二圓の季寄せ引く

(一筆)

峠越ゆあさぎまだらに秋の風

短冊に一句したため筆始

(みちくさ)

連れそひし夫婦の呼吸五段稲架

桜咲く侍ジャパン世界一

小さき舟ふせて岬の冬仕度

岩蔭の浅瀬に生ゆる沢山葵
観音の眼ざし遙か鯛雲

舳みな初日に向ける志雄の浦

車窓より宵の信州星月夜

生田 曉美

石垣 みち代

赤々と山染まる頃閑古鳥

あら草にぼつと顔出す狐花

鎌倉の人混みよそに金木犀

秋刀魚焼く戦ばかりの地球かな

秋高しバツハの響く西洋館

池野 隆

石崎 玄舟

(天為湘南)

(一葦)

ポールペンノツクの音の冴ゆる朝

晩学の単語帳買ふ春の夢

なんとなく書店に向ふ春嬉し

思い出せこの若夏の肩車

忘るるな摩文仁の夏の鉄の雨

初日記先づ快晴と記しけり

諍ひのあとの淋しさ春炬燵

囀りや特等席の丸太椅子

花曇何でも褒める九十才

柿若葉阿吽の呼吸遠くなり

(波)

産土の千年杉の淑気かな

筍を巻きし地方紙読みふける

草取りの首手拭に酒屋の名

餌を終へてすぐに砂食む金魚かな

家計図に加筆の年期文化の日

伊藤成子

(天為湘南)

咳の児の背さする三晩息静か
春めくや仁王は見得の手を睨む
寺隅の椅子の硬さや日向ぼこ
小言あと母の涙や半夏生
給料日ガラスケースの秋刀魚かな

伊藤就晤

(天為湘南)

筍を土間に放りて朝餉かな
若竹や異国の力士腰高し
地球儀の傾く理由夏休
朝顔の咲き分けにけり影日向
螿螂の無人販売招きをり

伊藤美也子

(波)

寒林や一本の道貫けり
春深し消炭色に暮るるなり
谷戸小谷戸春夕焼のすみわたる
新樹光愛する力残りをり
雲の峰ざぶざぶ目玉洗ひけり

稲垣正晴

(くら)

サンダルや素足に触れる朝の草
せり出して冷やし中華の絵看板
懸案にやつと向き合ふ梅雨籠り
梵字浮く青葉時雨の不動尊
蛸や何もせぬまま日が暮れる

今井 美恵子

(波)

わが街も銀座のありて年新た
雛の前二人つきりの宴かな
駆けてきし夏少年に似て眩し
朝顔のそば砂浴びの雀かな
江ノ電を和田塚で降り夕笹子

居山 勝

(天為湘南)

診察室のカーテン越の初笑
みどりごのにぎにぎの手や春つかむ
初ひばり夢の音するランドセル
炎昼や沈黙続く自動ドア
桐一葉終活帳の一行目

岩谷 明子

(冬すみれ)

ムーティにまた会え上野の夕桜
気がつけばピアス片耳春寒し
新樹光添えてテラスのランチかな
里山は栗花落となりて白き花
「深夜便」聞きつ窓辺の雪明り

岩見 好晃

(しら)

木道の蒼き淵辺に半夏生
八月や崩れしままの墓ありぬ
落ち蝉や掃き寄せられて回向院
イージスの高きレーダー秋の晴れ
焼き締める備前窯裏曼珠沙華

植田裕子

(xv)

崖下に虫袋の細き径
木道に小さな帽子未草
雨ほつほつ長屋門への四葩濃し
昼寝より覚めたる幼吾に笑み
母逝きし後の年月草の絮

う さ お

(はこべ)

浜夕焼砂紋に残る日の疲れ
名月やそつと汲み取る絹豆腐
蛞蝓に塩ふり懺悔懺悔かな
露草の庭よ潮風満ちてくる
空蟬のしがみ付きたる原爆忌

江口文子

(天為湘南)

花冷の椅子の硬さやツインバス
すずらんやキーホルダーの鈴の音
フルートに和したる窓の若葉風
サングラス少しずらして街を見る
惜しみなく今日のいのちの揚花火

遠 藤 ますみ

(天為湘南)

新刊の帯光出す四月かな
母の日や舌にほどよき和三盆
子午線の通る海峡大南風
アイロンの滑り軽やか夏衣
夕顔や白き風舞ふ京町家

大内 絵 美

(から)

緑蔭を奏づるラヴェルの指欲しき
水無月の蝶はいづこかシヨパン弾く
片陰に留まるは親ばかりかな
喧嘩してアイス最中を真つ二つ
蝉時雨キャッチボールの母息子

大内 洋 子

大久保 啓 子

(たけのこ)

我が母郷菜の花畑と青い海
夏の雲飽かず眺めて独りの日
雲の峰もう少しだけ頑張らう
流れ星夫の心の平らかに
盆唄の途切れ途切れにひとりの夜

大庭 浩 子

(天為湘南)

天国へ緊急メール桜咲く
富士の端に夕陽炸裂卵波立つ
蛍の夜川のゆらぎに星の海
星合や古き社の梶老樹
また一つ木の実降る音山の径

(天為湘南)

初電車膝おくりしてもう一人
梅真白子の素直さをほめてやり
五月闇半人半獣伝説画
梅雨晴や杖のあふるる集会所
秋彼岸墓のありかも知らされず

大庭葉子

噴水のくづれうかびし親子連

(天為湘南)

あぢさゐの相寄り藍をもりにけり

瓢箪の鬼のつかめるくびれかな

藤棚の会釈をかはし名を知らず

かろがろと鉄塔かかげ山笑ふ

大山美和子

夕日差す広き静けさ雛の部屋

(天為湘南)

どこまでも自由奔放花吹雪

鬼ごっこ駆け出す子らよ春うらら

青嵐中学校の体育祭

夕焼けや補助輪はづし一周す

大平雅芳

臨海の梅雨の深さへ鶴見線

(やうら)

コンビナート丸ごと梅雨の中にあり

泡盛や海ゆつくりと暮るる島

成田発夜間飛行は白夜行き

八月六日の太陽沈む太田川

岡本泉

放送のポリウム増せり運動会

(鷹)

逝きし日の短かき言葉鉢の菊

柿熟るる夕べは風のつのりけり

源流の幽かな音や藪柑子

故里のはらからやさし野紺菊

小田 徹夫

(2019)

江戸つ子の気つぶでかつぐ神輿かな
雨だれの石穿つ寺花菖蒲
人の世の理不尽に咲く蓮の花
八月や父に百寿の祝ひ膳
生き尽くしたただ生き尽くし蟬時雨

男 波 弘 志

(2019)

啐啄の刻満ちてきし抱卵期
日傘して方寸の影足元に
黒板の文字すぐ消され青嵐
青桐や夕餉のあともある日暮れ
人ごゑをてのひらがこひして晩夏

折 原 千 恵 子

(天為湘南)

元旦や会えない友と長電話
ゴーヤカーテン種まき描く夏立ちぬ
ぼつくりの鈴音うれし七五三
のぞき込む奈落の底から秋の声
夜神楽のわらい膨らみ渦となり

加 藤 静 子

(波・はこべ)

白芙蓉術後の友の胸うすき
病む友の夜の長さを嘆きをり
約束の蛍見待たず友逝けり
亡き友が秋の風鈴鳴らしけり
山しやくやく咲いて寂しさ募りけり

金井京子

(天為湘南)

西向きのポストに赤き葉鶏頭
無花果をもぐ手に伝ふ白き乳
枝重き鈴なりの実や鴟高音
投網打つ魚跳ね躍り川に立つ
里山の見上げる空の星月夜

釜本俊男

(天為湘南)

薨打つ五月雨の音また樂し
浴衣着をどつと吐き出す小駅かな
異常氣象金木犀の香り立つ
風涼しコスモス笑顔平和乞ふ
秋の風熱中症が嘘のやう

金子真弓

(天為湘南)

梅が香をまとひ足湯に浸かりけり
柔らかな富士の稜線春霞
老夫婦手提げ袋に菖蒲の葉
夏海波間に鷗の見え隠れ
鈴激し跳人の武者絵と競ふごと

神谷章夫

(くら)

軽トラがあつて植田の景となる
お不動の片目はずぶら葛桜
油照海見えぬまま海の駅
妻と子の同じ足音秋思ふと
遊行忌や案山子のやうに何もせず

亀倉美知子

河村笑

(波)

豊かなるふるさとの井戸冷素麺

子供の日声の戻らぬニュータウン

山車引くや大音声の「大まがり」

ふるさとの林檎もみ殻にもかをり

初富士へ向ひておのれ無となれり

川口和子

河村青灯

(天為湘南)

春立つや楷書きりりと師の便り

花冷や生薬にほふ古土瓶

白牡丹終の一片残りをり

空缶の漂ふ運河薄暑光

小舟ゆく海を遥かに青蜜柑

(鷹)

ぼんぼりの火点し頃や花の雨

熱の子の寝息落ちつく緑雨かな

午後からは荒れ模様らし白牡丹

連弾の姉のおさげや緑さす

夕暮の祇園囃子の渦に入る

(鷹)

短夜のながき夢なり覚めて愛し

地芝居の明りに逸る下駄の音

声囁らし渡御暁の海に入る

ふたたびのひとりを生くるパナマ帽

冬霧に鉄路の記憶レンゲワ橋

川本みつえ

久保田恵子

嫁ぐ日やこれが最後と雛飾る

(木犀会)

螢待つ茜に染まる森の中

(鷹)

夏山やしぶき散らしてダム放流

白南風や苞の月桃香の強き

五月鯉筑波の風を全身に

青葉山寺は塵芥燻らしむ

冬空に融けて天城の桐の花

豆むしろ広げし母の手のごつく

ぐい呑みに月光映し酒を酌む

万緑や町を眼下に石舞台

草柳節子

黒川 堇

今朝もまた薔薇の蕾を数へをり

(天為湘南)

花合歡の葉の閉づる頃母の声

(天為湘南)

短冊に墨の香の立つ文化の日

豪州の薄暑の夕べ鴨嘴

古民家の坂を上げば杏の実

紅茶葉の浮きては沈む春うらら

秋風を友に散歩の足のばし

初参り桧の香の満つる地藏堂

木の葉雨をどる姿に見とれをり

羽子突や本気の父に勝気の子

k e i t o

小 高 秀 則

夜の更けてそうつとしまふ桜貝

うそつきとにらむあなたと蛇苺

あぢさゐの色づくあひだ恋をする

ストレスは子にもいろいろ椿の実

湯豆腐やつかみ難しはひとごころ

(天為湘南)

一行に足る七十路の夏見舞

をちこちに風の足跡青田面

「魅惑のワルツ」流るる午後や檸檬切る

自由自在人無き駅の秋茜

野になびく風の気ままに吾亦紅

(小高秀則)

小 関 こうこ

小 林 和 子

醒めてなほ胸に問へり春の夢

父母の墓鮎の瀬音を聞きをらん

メロデーの奏でる道路青葉風

さりげなく十薬活けて漢方医

足場解く声かけ合うて夏の暮

(天為湘南)

(一 葦)

入り組みし路線図たどる小春かな

花ミモザケーキシヨップのテラス席

農小屋のぼつんと置かれ日永かな

大いちやう実生若葉に囲まるる

山蛭の立ち上がりたる黒き影

小林 美知子

(天為湘南)

梅の幹龍のうろこをまとひけり
子どもらが笹舟競ふ春の川
雲裂けて日射しのぞける夏來たる
梅雨晴れの空切り裂きて飛ぶ燕
孤り座して本読む夜長深海魚

小林 律子

(天為湘南)

落柿舎のしぶき茶を飲み春寒し
江の島の茅の輪くぐりや海光る
漆黒の空に揺らめく竿燈かな
じりじりと真昼の喧騒蟬の声
実る穂をなぎ倒したる野分かな

小堀 公美子

(鶴沼かほちゃ)

独眼の達磨を焼べるとんどかな
もう聞けぬ父の我儘春の雪
アトリエに削る楠の香聖五月
せせらぎの微かなる音花茗荷
過ぎし日の遙か遊行の忌の彼方

小松原 キイ子

(一葦)

ひとときの四つ葉探しや春惜しむ
乾拭きの太き柱や涼新た
萩の花まだ咲ききれぬ風の先
二度咲きの匂ひ新たに金木屋
色を変へあしたへ繋ぐ毛糸編む

小山 美穂

(株)クラブハウスインユー

青蛙指に乗せたとし遊びたし

桐一葉落つるほどなる小さき夫

ウエディンググネズの妻にとなりにけり

墓参り病で祈る吾に文あり

盂蘭盆会供えしとうろう吾一家

小山 ヤヨイ

(あら)

門に待つ母のエプロン月に映え

星月夜君をハグした窓にひとり

待合室同じマフラー老親子

メデイチ家の空気そのまま古暦

冬木に実丸く大きな二羽の鳩

紺谷 健一朗

(さら)

遠き地に子は職を得し雲の峰

更けてより踊る輪に入る母の影

信金の若手総出や盆踊り

雲が墓標父つぶやけり終戦日

青墨の見舞ひの筆や今朝の秋

近藤 博美

(天為湘南)

一瞬の翡翠青き線となる

ふるさとの言葉聞き入る夏の旅

秋の日の回転木馬時駆けり

若き日の夢の残りを摘む花野

明けの星次の舞台へ旅途中

齊 藤 久美子

齊 藤 義 昭

(天為湘南)

(天為湘南)

老木の折れし枝にも八重桜

空家にも白梅咲けり堂堂と

花火師の夢と情熱夜の空

水かさを増して勢い春の川

月眺むいにしえ人に想いはせ

月下美人夜更まで待ち酒二合

野分け来て漁船連なる港かな

風抜けの床で大の宇夏合宿

芒原色なし風になびきけり

風渡りさざ波となる稲穂かな

齋 藤 まり江

坂 本 きみよ

(波)

(波)

柔らかき光の中の白椿

老耄は笑いとばして年新た

新緑の風にまどろむ午後三時

水の面の同心円や残り鴨

爽やかや一人夕べの海の風

飛び入りの手練れ男や踊り笠

秋澄めるヒマラヤ杉と白き雲

真四角に生きて手酌の冷奴

着ぶくれか鏡に斜に立つてみる

歳晩や寺へ寸志の竹箒

さとう 桐子

(天為湘南)

絵らふそく消えゆく花の朧かな
つらゆきのかな文字散らす桜まじ
散る花を寄せて走り根やはらかき
夏のゆく原風景を拾ひつつ
和菓子屋の日除を残し店じまひ

佐藤 美津子

(天為湘南)

風薫る庭で一服旅ごころ
夕焼け空仕事帰りのプレゼント
囲碁将棋力五角の野分かな
故郷の大地を覆ふ稲穂かな
子規庵の庭にさし込む月あかり

佐野 恋蔵

(さら)

角たたぬ話し上手や冷奴
片蔭を手繰り手繰りて陸奥へ
さんざ踊り地層一枚捲れたる
炎天の鉄路まつすぐ草田男忌
姥捨や昨日遠野の青田波

鮫島 美和子

(天為湘南)

小綬鶏の覗く旅館の朝餉かな
春一番止みて深夜の救急車
パレットに桜蕊ふり天守閣
水張田や鷺のつそりとパトロール
なだらかな句碑の小径や水引草

篠田清秋

犬と見る富士と江の島初日の出
梅雨明けや家に保護犬迎え入れ
敬老の日姥捨て実は長寿里
ハロウィンや戦死兵達化けて出る
クリスマスプレゼントせよ地の平和

篠原広子

落日を背に蜘蛛の囿の静かなり
葉も泥も鳥らつきよの届きけり
捨てらるる苗にひとしく雨の降り
カンパネラと話しかけたき星月夜
自炊棟へ分かるる廊下黄菊咲く

島田昌子

大寒やナースコールの途切れなく
点滴に確かなリズム春近し
菜の花のお浸しものせ配膳車
爪切らぬままに退院春浅し
病院の栄養指導水温む

清水和徳

はらはらとえご散り来たる九十九折
駄菓子屋の軒の低さよラムネ飲む
大汗の漢の首に豆絞り
夕顔や父の鼻歌湯殿より
長靴の足裏の見上ぐ鱗雲

四 郎

鈴木 千枝子

花に雨 エゴン・シーレの憂い顔

(天為湘南)

深更や野分吹き荒れ鬼の声

花は今 引継ぎ済みて机拭く

春雨のシヨパンのワルツ 駆ピアノ

雨音や庭を眺めて猫うらら

鈴木 絹子

(冬すみれ)

悠々と雲沸く峰や黄菅咲く

ふわり被る父の匂いの夏帽子

椅子二脚持ち出す朝や百日紅

秋茄子を鳴かせて洗う厨かな

棕の実やまだ生きているポンプ井戸

秋霖の香一筋のくゆりかな

ウキスキーの琥珀に透ける秋の燈

風紋の流るる果ての大銀河

行く秋やクロスワードの埋まぬ枿

長き夜の紅茶に添へる砂時計

鈴木 千砂

(しら)

伽羅蔭に一合半の女酒

黴の香や蔵書票には父の筆

花合歡の魔法にかかりまどろみぬ

濁流の上に濁流梅雨出水

骸となりて向日葵のなほ余熱

須藤 亮

栖原 由美子

(くら)

父の日の忘れられしか一人居す

紫陽花の色はおそらく雨の色

裏庭を進む蛇ありただ見つむ

少女みなすすくすく伸びよ立ち葵

無住寺に人影のあり夏木立

(鷹)

竹伐るや地下の男のはだしたび

地祭に切麻舞ふや小春空

春永や水琴窟に耳あてて

芥舟をゆらす寒鯉緩る緩ると

開店の湯屋に人待つ日永かな

須藤 かぐや

角 和富

(なら)

夏至の日にひとり酒してまだ暮れず

潮騒とキューバのリズム海の家

炎帝や御屋敷崩すブルドーザー

遠火花あちこち見ゆる相模灘

庭涼し一歩一景愉しまん

炎天下流れる汗は悲鳴かな

施設にて演奏したり汗ばみし

病院で告知受けた日原爆忌

極暑日の山火事はみな非常かな

つるつると冷素麺を流しけり

すみこ

関 美 晴

(天為湘南)

(波)

大寒やえいつと気合の寝床から

猫眠る江ノ島一丁目の余寒

啓蟄をわかるか虫たち動き出す

茅花流し海空つぼの水平線

蒲公英の寄りそふ姿SDGs

花梯梧手折れば傷のなほ香る

秋茗荷よいしよとふんばる鉢の下

紆余曲折にじむ風格裸の木

肌寒し始発電車の音遠く

千歯扱き子らの声湧く小春の日

隅 田 泰 子

関 本 朗 子

(天為湘南)

(天為湘南)

靴ひもを結び直して梅雨晴間

おぼろ月更地に還る家屋敷

豌豆の莖にミニーの絆創膏

僻耳のふたりとなりぬ胡瓜揉

黙禱に蝉の唱和のいちだんと

日晒しのシーツの硬さ夏の果

思考力どこかへ忘れ残暑かな

ひとり行く道の暗さや遠花火

塩小匙一のレシピやなめくぢら

しじみ汁振り返らずに子は発てり

草 心

高 瀬 俊 次

風にのり甚句の届く夏祭り

江ノ島の花火動画をじいばあへ

窓枠を額に飽くなき秋風情

広広とビル建つ前の空高し

どこまでも空の青さや秋刀魚焼く

高 久 弘 行

高 野 尚 志

偏屈な漢は行かぬ片かげり

はんざきは哲学の徒かものぐさか

吾になく子にはあるらし夏期賞与

浅草の大暑引つ張る人力車

語り部のまたひとり逝き浦上忌

老耄の集ふ学校窓若葉

老幹の力まだまだ梅真白

桐一葉老後大事に生き抜かむ

露万朶百歳超ゆる九万余

百歳を見すゑ十年日記買ふ

(天為湘南)

(なほ)

み仏の紅美しや寒の内

春の灯や母のやうなる占ひ師

炎天や岩場に垂るる命綱

何もかも捨ててひかりの芒原

冬北斗一誌の指針ゆるぎなし

田中 梓

(天為湘南)

夏旅をほどけば空と海の青
幻燈会おさげ髪の吾君の夏
躍りゆく盆の闇へと西馬音内
尼寺の門扉に縋る秋の蟬
阿と吽の間合ひに霧のよぎりゆく

田中 千佐子

(湘南若葉)

爽やかに父の晩酌よみがへる
新蕎麦と地酒と父の居る景色
相馬焼に父の手触り新走り
長き夜や書き込み多き父の本
父の忌はジングルベルの届く頃

田中 素子

(天為湘南)

放水にすかさず鳴けり秋の蟬
吾の影に舞ふ朱の色や秋の蝶
野分あと海鳴りやまぬ夜更かな
天指して叢がり咲くや曼珠沙華
古代史の百濟遠征読む夜長

田中 洋子

ひそやかに香のこぼれをり薄紅梅
胸中の夫に一献夏の月
短夜や乱れしままの写真集
遠くて近し黄泉の国より虫の声
悠久の川音へ飛ぶ赤とんぼ

田辺年子

手塚智之

(天為湘南)

身に入むや若人尽きて英兵墓
退職し近所で完結日日うらら
秋場所や勝負の刹那美学なり
消防士の人気は昼は豆御飯
秋の川強き流れに嘆き捨て

(みちくさ・かわせみ)

花筏押し流してや鯉の群れ
鉢植えや枇杷の実七つそれなりに
梅雨入りや妻と二人の大欠伸
どこいくの母の口癖炎天下
原爆忌悲しみ超えて夏木立

千葉民子

常盤貴美子

(冬すみれ)

夏萩にふれてのぼりぬほとけ径
背負ひ籠に小菊も容れて里の婆
アルプスは真向にあり蕎麦の花
秋日燦相模の海の平らかに
むかご飯山の夕焼けつれて来る

一椀に野辺の明るさなずな粥
点描となる釣り船や島の春
洗うごと青田に風の行き渡る
秋思ふとキリンの長き睫毛にも
数え日の歩幅となりて小買物

朽尾まほ

永井かほる

(波)

山鳩のシルエットのみ霧の朝
天高し空を映せる玻璃磨く
犬の尾の炎となりぬ秋夕焼
蔵町の青空に藍秋のれん
秋の夜の空白埋めるガラスペン

紫木蓮布教の人を歩ましむ
よみがへる胡蝶蘭より夜の調べ
砲兵のごとき向日葵列をなす
燈火親し万葉集に夜の更くる
蛸や一山の闇迫りくる

内藤 繁

永塚 享司

(天為湘南)

秋天や刑場址に大本堂
土牢に一宿一飯稲びかり
潮騒に夢を描きて寝待月
土牢の上に土牢月鈴子
土牢や出入り自由な秋の虫

夏の宵縁台出せば星の降る
ひまわりのあちこち揺るる迷路かな
名月や今宵は妻とハイボール
夕闇に灯火の如き彼岸花
窓開ければ木犀の香の鼻先に

中村 初江

(x5)

古書店の黴の和綴をそつとそつと

梅雨深し友逝くを知る同窓誌

緑蔭や葉挟んで験閉づ

香合は鎌倉彫に風炉じたく

ジエラートの色とりどりに通り雨

中村 みき子

(x5)

菖蒲湯少し背筋の伸びたやう

新緑や抱つこべルトの父ばかり

足ること知る幸せや蝸牛

緑蔭や今は友とも言へる子と

夏の川子ら町中に見守られ

成岡 明子

(x5)

打ち水の終りは今日の我に向け

摩崖仏の涙なりしや滴れり

昭和から現に戻る昼寢覚

麦藁帽に遊び足りたる日の匂ひ

応援の声も日焼けの母校愛

新坂 雅子

(波)

山百合やきりぎしに聴く谿の声

朝顔や婆の山家の水の音

野に展ぐ捩摺草の恋の詩

八甲田山ケール乗場の花嫁菜

機関手の手を振る鉄橋秋高し

西野洋司

野原青

(湘南俳句文学研究所)

(さら)

先づ富士の湧水グイと年明くる

湿原を斜めに走る緑雨かな

妻間もなく入院満開薔薇の庭

そよそよと薔薇のガゼボのティータイム

妻夙に癒えよ若葉のそよぎある

青富士のここにをるぞと梅雨晴れ間

どこからか音楽薔薇に指刺され

敗戦忌仏間の遺影若きまま

友迎ふ日なり全開ハイビスカス

「語り」聞く子ら沈黙す原爆忌

能勢マサ子

野村悦子

(天為湘南)

(湘南若葉)

夕焼へ近づく港の観覧車

千草の供華あふれむばかり矢倉仏

凜と咲く清香の梅へ背筋せり

亡夫つまに点す秋七草の絵蠟燭

畦道や紫陽花水車の音高く

遠く来て放生池の蜻蛉かな

夕暮れの祭り囃子に下駄の音

その丈を雨したたかに男郎花

テスト百点ご褒美カレーは秋の色

老猫おいせの見向きもあらず猫じやらし

槁本信一

初鹿光子

病得し姉の声聞く年賀かな

若き日の別離を想う水芭蕉

ジョージアの森にただようハナミズキ

ふるさとに水溢れんか台風来

ふるさとの友をしのびて窓の雪

畑中典子

原田稔

(天為湘南)

秋草に足取られたる小径かな

秋茄子の色を愛でたる夕餉かな

八朔や京の舞妓の艶姿

港町海に色差す薔薇の園

段葛さくら吹雪に笑顔かな

沙羅の花幾十散りてもの言はず

緑さす武蔵野御陵へ白き道

みどり児のよく動く足夏はじめ

雷鳴や吉兆なれと手を合はす

百歳の角張つた文字夏便り

(あら)

海棠や目覚め促す風優し

凜として虫を拒まぬ花胡瓜

初島や肩寄す親子桜かな

台風の上見上げている濡れ鳥

江の島や悠然と打つ冬の波

原 戸 正 子

(天為湘南)

蓴採る小舟寂しき沼の上
夏木立空を仰いで深呼吸
薔薇の香や巻紙とりて硯出す
秋刀魚焼く見つめる二人細くなり
五月晴笑顔あふるる一両車

原 山 テイ子

この径が好きです大樹の上に秋
月がもう眠たくなつて夜が明ける
たつた今すれちがいけり秋の風
静かなる胎動冬の海に来て
喜んで良いやら桜満開に

平 岡 法 子

(冬すみれ)

春近し友との会食願いおり
春彼岸入れ替わり来て子ら元気
戦なき日をつなげたき一遍忌
十五夜に雲遊ぶさま見守りぬ
数え日や余白少なき予定表

廣 崎 龍 哉

万物の輝きわたる初日かな
春の空キリンは首を持って余す
風鈴屋銀座の風も売つてをり
行く先は風にまかせて草の絮
枯蟪蛄戦意いまだに衰へず

福田善吉

藤田真知子

(冬すみれ)

(天為湘南)

腕まくり窓一面の春を拭く
男手の少し粗切り胡瓜もむ
海に沿い軽ろきペダルや夏に入る
夕暮れの町に潮の香卯月かな
ほつくらと野面の夕日春近し

詩心を与へよ吾に寒昴
父の手の木彫の菩薩風薫る
能管の昂ぶる調べ梅真白
一湾の万丈の默星月夜
神舞の能管一声天高し

藤田松邑

藤森楓

(天為湘南)

同窓の仲間の案内歌う秋
菌の乱負けるな八十路妻共に
八十近し早逝父の倍の秋
初孫の修学旅行や秋日光
遠足地江の島近くで半世紀

点滴のホスピスの窓星流る
秋夕焼赤毛逆立つ双生児
波高き浜に海豚と標本土
狐火や電話不通の二三日
オカピの縞縞タイツ冬ざるる

古屋 さちこ

(天為湘南)

つつじつつじ歩きてもまた歩きても

葉桜や見合の返事先送り

炎暑日の家事一切を休みけり

厨房の窓に名月指定席

お手本をなぞりて書くや筆始

保里 よし枝

(サンシャイン句会)

空箱の隅の指あと秋思なる

こおろぎと一夜限りの同居なる

秋しぐれ腕に前夜のやけど跡

同じ処つまづくピアノ小鳥くる

ねこじゃらし私あずけている主治医

堀口 みゆき

(鷹)

ハロウインの魔女と乗込む観覧車

街路樹の等間隔の寒さかな

ミサイルも黄砂も飛ばぬ日のひかり

噴水やプードルの胴刈られ瘦

病人の秘密聞きをり青葡萄

馬来 まち子

(サンシャイン句会)

竹裂ける音して寒の明けにけり

方丈に人声のあり麦の秋

透通る毛細血管麦の風

朝勤へ僧の摺足もずの声

表札は父の名のまま松手入

松平恒夫

水沼富子

(天為湘南)

(x5)

風光る母にポーズのランドセル

青梅や孫が待つてる梅ジューズ

囀や右往左往の遠めがね

蝉の声降りて積もるや山の寺

グランドに鳥のスキップ芝青む

サングラスかけて大人の気分なる

土手日和蓬摘む人走る人

向日葵はなべて夕日に背を向けて

草いきれ太陽パネル並ぶ過疎

忠霊塔に父の名ありて敗戦日

三品敦子

宮川敏江

(天為湘南)

(波)

万物がスローモーション春の川

谷戸奥に水車うなりて山法師

似たるもの孫とひよことチューリップ

杜鵑草一点物の染上がり

感情のさせぬマスクし卒業す

時刻むかに清秋のマンドリン

スピノサウルスに輝く瞳こどもの日

返事なき上がり框へメモと栗

夕焼に染まるケチャックバリ想起

足場組む本堂奥の一寒灯

宮地敬子

森田順子

(天為湘南)

水仙の母にも似たり凜と立つ
幸せの五弁のどくだみ白栄えて
奪ふ鳥笑ひとばして遠足の子
屋根を打つ雨音響く秋意かな
主去り影引く窓に小鳥来る

寒の水うがひののどにひびきけり
つちふるや楠千年の幹のこぶ
まづ富士に挨拶夏のはじまりぬ
実むらさきの小路に迷ふ日暮かな
聖樹すゑて雑踏の夜のととのひぬ

宮永武彦

森本明美

(はまべ)

山嶺やまねの傲おごり鎮める秋夕焼
行く秋を見送る君も茜色
小町通りにラテン語溢れ秋うらら
錠剤を半分はんぶんに割る夜の長し
人が好き熱爛あつたの身に染み渡る

土筆摘む指ほのかなる地の温み
花は咲く非常の世にも惜しみなく
黒南風や若き残像逗子の海
さわやかや語尾やわらかく伊予訛
僧侶行く遊行寺坂や風花す

柳生恵子

柳蒼柳

(天為湘南)

白障子ほのやはらかき閑居かな

朝顔を数ふる暮らし今日もあり

束の間を灯す一輪螢草

十国の秋風束ね峠道

糠床の旨味育む夜長かな

(神奈川現代俳句協会・辻堂句会)

律儀かなこの日に咲きぬ彼岸花

むら雲をけんけん遊ぶ望の月

明月や盤上をどる烏鷺の影

黄昏のなぜか胸うつつ蝸のこゑ

黄落や大判小判撒く如し

矢口美都子

山口愛子

(あら)

図書館の黙に身を置く梅雨入りかな

夏館瀬音高きに目覚めけり

サーファアの髪より落つる潮かな

夏果つや靱の底の一センチ

濡れ髪に指櫛あつる夜の秋

耳打ちの髪のにほひやラベンダー

巴里祭雑踏に聞く駄ピアノ

墓変身願望捨てきれず

この星の闇は深いと青葉木菟

車椅子回り道して落葉踏む

山下巖

(湘南アカデミア)

渋柿や卒業写真はセピア色
天高し草食^はむ牛を守る犬
毒を秘め咲き乱れおり彼岸花
教室の壁に君の名卒業す
露草や空の青さに勝る青

山下遊児

ラッパ水仙なんだか嘘をつかれそう
花粉症女の顔がピカソめく
戦争とバンドのニュース亀鳴けり
枯蝟螂ソクラテスには成り切れず
わざわざと落葉を踏んでいる僕だ

山田潤子

(天為湘南)

ほどけゆく光のかけら薄氷
尼寺の煙る竹林梅雨深し
蒼天に応ふる青き夏の潮
絹雲の広がる空や神の旅
赴任地へ遥かなる空寒昂

山田貴世

(波)

雛と生く昭和平成令和の世
外つ国の戦火いまだに竹の秋
師よ友よ巡る霊園春時雨
秋日和日の本一の富士全容
大寺へ裏道小道落葉道

山之口 春美

ふみ箱の古き写真や麦の秋
終戦日母の昨日はケンケンパ
朝練の声弾みおり解夏の町
鬼やんま避難訓練偵察中
わあんわあん泣けばよかつた枯野かな

山本 協子

夕立や本のやうには行かぬ恋
緑蔭やハシビロコウのやうな母
青梅や辛口の愛ははの愛
末つ子の手を引き回る夜店かな
冷し中華好きの理由は紅生姜

吉田 秀子

どことなく吾に似てをり春の蠅
秋の田のこの金色きんいろは誰のもの
蟻がいく先達もなく殿もなく
今日ほどくそれとも明日ぼたんの芽
さまざまな修羅をしづめて山眠る

吉田 結香

かげ満ちゆく 水面みなもに映る 照紅葉
息白し パン屋のとびら いい香
冬の朝 ふとんから出る また入る
いちようの葉 緑と黄色の つな引きだ
茶の緑 菊形の菓子 疲れとぶ

(藤沢市立大鋸小学校五年)

米澤 然

渡部 有紀子

朧月我もほぐれてゆきさうな

春嵐仔犬負けじと仁王立ち

バス逃し広がる大地風薫る

子にならひ芝に大の字空高し

笑栗の流し目につい手を伸ばす

渡部 喬

川音の遠く近くに稲の花

型打つて加賀の菓子抜く音澄めり

手水舎の水音細き木賊かな

夕風やまだ螢みぬ螢籠

絵具を溶く指の細さや十三夜

(天為湘南)

(xox)

浅葱色の沼底までも夏の闇

水槽の魚と眼の合ふ大暑かな

原罪の色は原色大西日

産土の沼を離れぬ鬼やんま

我もまた漂流せしや秋汀

第一二八回市民俳句春の大会

令和五年四月二十八日、藤沢市民会館第一
展示集会ホールにて開催。

参加者一一五名。応募者百二八名。

講演 角谷昌子氏（俳人協会理事・国際俳
句協会理事）

— 季語を生かす —

入賞作品

○特別賞 山下遊児

菜の花や父の匂ひの農具小屋

○特別賞 島田昌子

幸せを零さぬやうに桜貝

○市長賞 福田善吉

腕まくり窓一面の春を拭く

○市議会議長賞 前田弘子

また一羽加はる影や春障子

○教育委員会賞 増井智子

春北風余白少なき墓誌ぬぐふ

○俳句協会賞 上春那美

ささくれの地球に浸みる春の雨

○協会賞（以下同） 川路ゆさ

たましひや例へば真夜の八重桜

山盛りに揚げるコロツケ春の昼 河村笑

老いて知る妻のやさしさ花菜漬 寺田篤弘

パレットに色足すやうに春さざす 佐藤享子

ふらここや少年自我の風を切る 永井かほる

落日の大地を制す野焼きかな 山田節子

万物の尖りを撫でて春の風 藤井素

母の日や百歳の笑み皺の中
初鹿光子

中根美保

ここよりは支流に分かれ花筏

石垣みち代

嘘ぼろりくるりと廻す春日傘

鈴木千枝子

先頭のたくみな交代雁帰る

酒向昭

白蝶について行こうか岐れ道

松坂真理子

春泥の靴づかづかと児童館

青木敏行

龍天に登る江ノ島大灯台

鈴木絹子

丁寧に洗う絵筆や水温む

高橋寛子

まつ青な空搔き抱く辛夷かな

ほがらかな媪百歳山笑う
村上京子

清水和徳

風光る回転木馬塗り終へて

坂本きみよ

春一番窪に身を寄す雀どち

前田恵美

アトリエに大きな鏡春の雷

矢口美都子

寄せ書きの君の名見つけ卒業す

堀口みゆき

地図になき島の名あまた流し雛

中村初江

和菓子屋の菓子の色より春めけり

植田裕子

春の昼抱く子ふはりと寝入りたり

紺谷健一郎

大観の富士浮かべたり朝霞

水口に睦びあふ神種漬花

高橋純子

山小屋の賢治詩集や春灯

徳江祐子

木の上に追ひつめられて猫の恋

山本協子

第四十八回一遍上人忌俳句大会

令和五年九月十七日、時宗総本山・藤沢山清
浄光寺(遊行寺)大書院にて開催。

参加者八十名。事前応募句による参加は
一二二名。

講演 岸本尚毅氏 (「天為」「秀」同人)

―俳句鑑賞の楽しみ―

文豪の俳句を読む―

応募句の部 入賞作品

○遊行寺賞 山下遊児

底紅や母の遺品に父のもの

○青木賞 酒向 昭

一遍忌草に埋もれし道標

○北澤賞 大坪 正美

一遍忌風が言葉を運びくる

○市長賞 高橋 きよ子

一茎の稲に手塩の重みあり

○協会長賞 亀倉 美知子

秋風や父母なき郷の沈下橋

○協会賞(以下同) 松坂 真理子

秋耕や天地を返す力瘤

中根 美保

廻廊に水の匂ひや一遍忌

中村 みき子

背の子も体を揺らす盆踊り

大谷 祥二

露草や猫の道ある堂の裏

加野 哲朗

刈り残す畦の数珠玉一遍忌

横山 節子

沢鳴りの棚田をめぐる虫送り

渡部 有紀子

遊行寺の秋冷およぶ床の艶

宮澤 進

池の鯉影深くせり今朝の秋

花芒記憶はやがて透明に

尾崎 竹詩

鈴木 絹子

かなかなや日陰る山も照る山も

遊行忌や案山子のやうに何もせず

神谷 章夫

野木 桃花

新涼の水をめぐらす大書院

鬼灯や母の齢に寄り添ひて

当日句の部 入賞作品

富山 ゆたか

○遊行寺賞

島田 昌子

一望の海へなだるる稲田かな

爽やかや兄弟で押す乳母車

山本 みか子

○青木賞

鹿野島 孝二

竹林に差し込む光一遍忌

爽やかや弥陀の御前の句座にゐて

鈴木 基之

○北澤賞

加野 哲朗

新米の粒は泪のかたちかな

爽やかや大き木魚に大き撥

大本 尚

○市長賞

堀本 裕樹

藤は実にひとりつさりの時の濃く

風いくつ乗り捨ててゆく蜻蛉かな

川村 研治

○協会長賞

小松原 キイ子

いくつもの橋すぎてきし一遍忌

爽やかや廻廊わたる風のいろ

○協会賞（以下同）

伊藤 真理子

秋蝶の風におぼれて風にのり

岩谷 明子

菩提子のこぼれて老いは音もなく

清水 和徳

クルス買ふ寺領の庭の蚤の市

佐野 健

爽やかな眼差しに逢ふ一遍忌

植田 裕子

破蓮の鉢に残りて日の強し

中根 美保

爽やかや玉砂利きしむ開祖廟

尾崎 竹詩

爽やかや大屋根空を押し上ぐる

関 美晴

とんぼうや手水に触るる水のしわ

神崎 芳孝

思いだすように吹く風爽やかに

常盤 貴美子

爽やかや直線に伸ぶ船の水脈

吉本 史子

爽やかな窓拭く僧や背のびして

石崎 晃笹

転がれる石さはやかないのちあり

前田 恵美

ざつと読む効能書や秋暑し

廣崎 龍哉

秋晴や亭亭として大銀杏

神谷 章夫

さはやかな人を迎へて一遍忌

堀口 みゆき

境内に続く校門芙蓉の実

渡辺 正剛

一遍忌杖つくことも堂に入る

馬来 まち子

一遍の踊り場跡や彼岸花

第一二九回市民俳句秋の大会

令和五年十月九日、藤沢市民会館第一展示
集会ホールにて開催。

応募者百十一名、当日の参加は九十六名。

講演 霧野萬地郎氏

―サファリ(旅)と俳句―

入賞作品

○市長賞 畑 昌子

遺されし鍵のさまざま雁渡る

○特別賞 中 根 美 保

蛸の水引くやうに止みにけり

○特別賞 大 平 雅 芳

鮭のぼる川瀬は夜も逸りゐて

○市議会議長賞 川 路 ゆ さ

青春のこぶしの堅さ花梨の実

○教育委員会賞 千 葉 民 子

むかご飯山の夕焼つれて来る

○俳句協会賞 関 美 晴

柿日和声の通りのよき日かな

○協会賞(以下同) 上 春 那 美

命名の墨の香立てりけふの月

小 林 和 子

引退犬にハーネスの痕秋日澄む

矢 口 美 都 子

天高し鋏を支へに一呼吸

山 下 遊 児

干柿に父より深い皺がある

古 市 シゲ子

曼珠沙華飛び火している森の中

加 野 庸 子

入院を拒む母との萩の道

山 田 節 子

青空に線描く自由赤とんぼ

海べりの道は弓なり秋灯し

富山 ゆたか

我が身攫われたくもあり葛嵐

安部 衣世

老いし母夜なべの針の緩きこと

小高 秀則

今少し夢を下さい大花野

石垣 みち代

紫の袷紗捌きや菊日和

森本 明美

庭花火つくづく夫婦二人なり

寺田 篤弘

テーブルの広く思へる秋思かな

中村 みき子

秋暑し床にころがる飲み菓

馬來 まち子

ぐつたりと川流れゆく残暑かな

原 雅子

原山 テイ子

小鳥来る人に会うたり話したり

坂本 きみよ

播粉木に手応え確か実山椒

伊藤 真理子

稔り田を鎮めて迅き雲の影

佐野 利典

溢蚊を連れて暖簾をくぐりけり